

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	<p style="text-align: center;">近衛 典子 【論文博士】 (比較文化学専攻 平成2年3月退学)</p>	要 旨
論文題目	上田秋成研究	<p>本論文は江戸時代の上方の作家、上田秋成について、従来の研究の主流であった、『雨月物語』『春雨物語』を中心とした論じ方に疑義を呈し、時代の動向や社会環境、交友関係などをも視野に収めつつ、多様なジャンルにわたる作品群を全体的に捉えることの必要性を提唱したものである。そのために秋成の多岐にわたる文学活動を、以下のような三部構成によって論じている。</p> <p>第一部では、秋成の代表作として捉えられてきた物語作品群を、過去の古典作品との関わりと、同時代の社会動向との関わり、二つの視点から論じた。秋成の『源氏物語』享受が複数作品にわたって、広範に、また多様な変遷をみせつつ行われていることについて新知見を示し、また「吉備津の釜」（『雨月物語』）に当代流行の信仰が踏まえられていることを指摘して、新たな読みの可能性を論じた。</p> <p>第二部では、宝暦・明和期の大阪に生まれた独特の文人集団である「大坂騒壇」と、そこに身を置いて作家活動を開始した上田秋成の生み出した作品群について考察した。騒壇の動向と秋成の関係について追究するとともに、従来看過されがちであった『癩癖談』等の作品や『伊勢物語』『万葉集』等の古典研究が、その環境の中でこそ生み出され得たもので、それらがむしろ秋成文学の支柱ともなっていくことを論じた。</p> <p>第三部では、還暦を機に京都に移住して後の秋成が、大坂とは異なる趣をもつ雅文壇との交流をもつことに着目し、伴蒿蹊や小沢蘆庵への共鳴によって、和文作品や和歌作品が生まれてくることについて、具体的な分析を通して論じた。また従来等閑視されがちであった秋成の江戸歌壇に対する関心について、新資料を提示しつつ論じた。</p> <p>以上を通じ秋成の文学が単に物語に収束するものではなく、和歌・誹諧・狂歌・古典パロディ・古典研究など、多様な広がりの中にこそ捉えられるべきものであることを指摘している。</p>
審査委員	(主査) 教授 荻原千鶴	
	教授 浅田 徹	
	教授 市古夏生	
	教授 高島元洋	
	教授 神田由築	